

## 野村町会地域における燃えるごみからの生ごみ分別・排出に関する協力度等の分析・評価

生ごみ分別に対する協力意向や、生ごみ排出量、回収量、分別困難な物などを把握し、回収率向上のための課題やその解消方法を検討するために実施した、アンケート調査の分析結果を取りまとめた。

### ① アンケートの設計及び実施

アンケート調査において把握すべき内容(調査項目)については以下のように設定し、モデル地域の住民を対象にアンケートを実施した。

<アンケートにおける調査項目>

- ・分別開始前の生ごみ、生ごみ以外の可燃ごみの排出頻度
- ・生ごみ分別実験中の生ごみ、生ごみ以外の可燃ごみの排出回数と1回当たりの生ごみの量
- ・生ごみ分別への今後の協力意向
- ・分別が困難な物の把握
- ・生ごみ分別における問題点等

アンケート対象者はモデル地域である野村町地区の住民約70世帯であり、アンケートの回答数は30件で、回答率は約42.9%となった。回答者の家族構成人数及び住居形態別の割合は、以下に示すとおりであるが、3人世帯が26.7%と最も多く、次いで2人世帯、4人世帯ともに23.3%となっており、平均家族構成人数は2.9人であった。また、住居形態は全てが戸建て住宅であった。

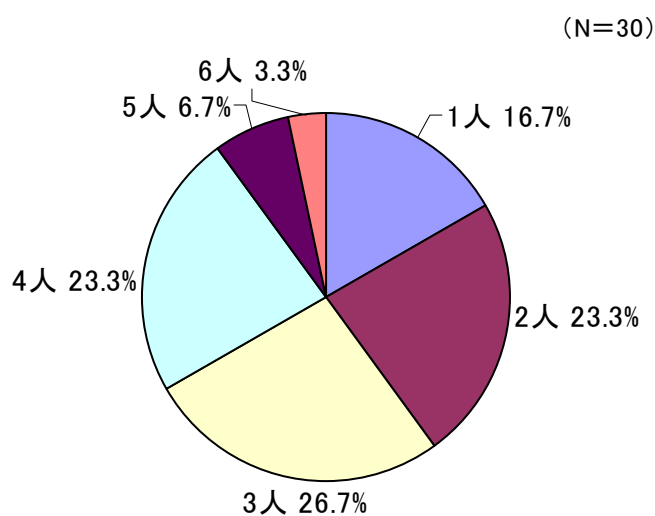


図 家族構成人数

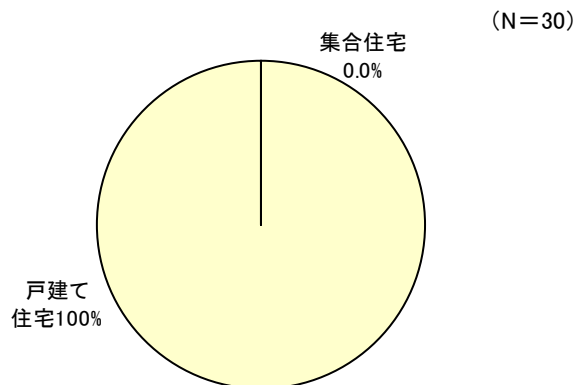


図 住居形態

## ② 実験参加状況

アンケートの中では、直接生ごみ分別実験への参加状況を聞いてはいないものの、実験中の生ごみ排出回数を回答した人の割合から推測すると、アンケート回答者の分別実験参加率は96.7%となり、非常に高い参加率であることが分かった。

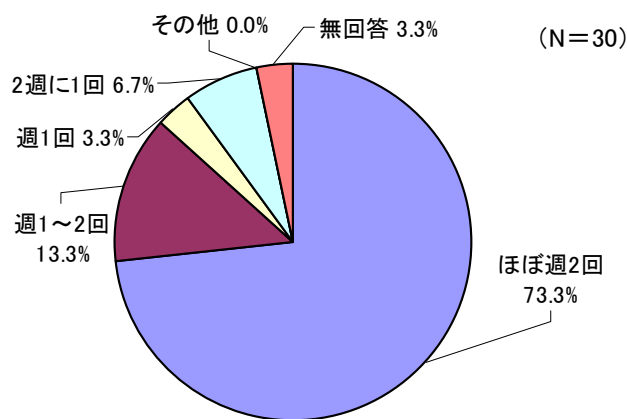


図 分別実験中の生ごみの排出回数

## ③ 実験実施中の生ごみ排出量

分別実験中の1回当たりの生ごみ排出量は、「バケツに半分程度」と回答した人の割合が23.3%と最も高く、次いで「バケツに1/3以下」が20.0%、「バケツに一杯」、「バケツに2/3程度」、「バケツに1/3以下」が16.7%であった。

バケツの容積は約15リットルであるため、半数以上の人々が7リットル以上排出した計算となる。これは、昨年度実施した上久保地区での実験結果と同じような値になっている。

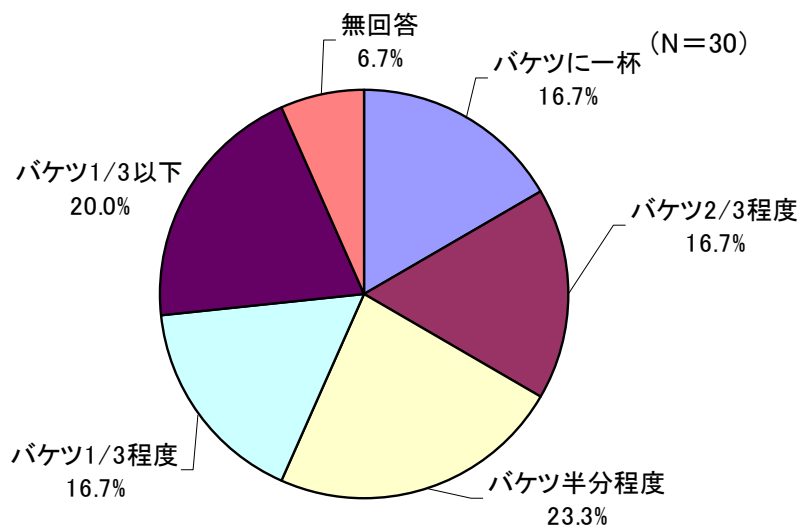


図 分別実験中の1回当たりの生ごみ排出量

#### ④ 分別の際の問題点・課題

分別の際に困ったことや問題点としては、「生ごみの保管場所」と回答した人の割合が40.0%と最も高く、次いで「生ごみ保管に伴う悪臭」が36.7%、「その他」30.0%となっていた。

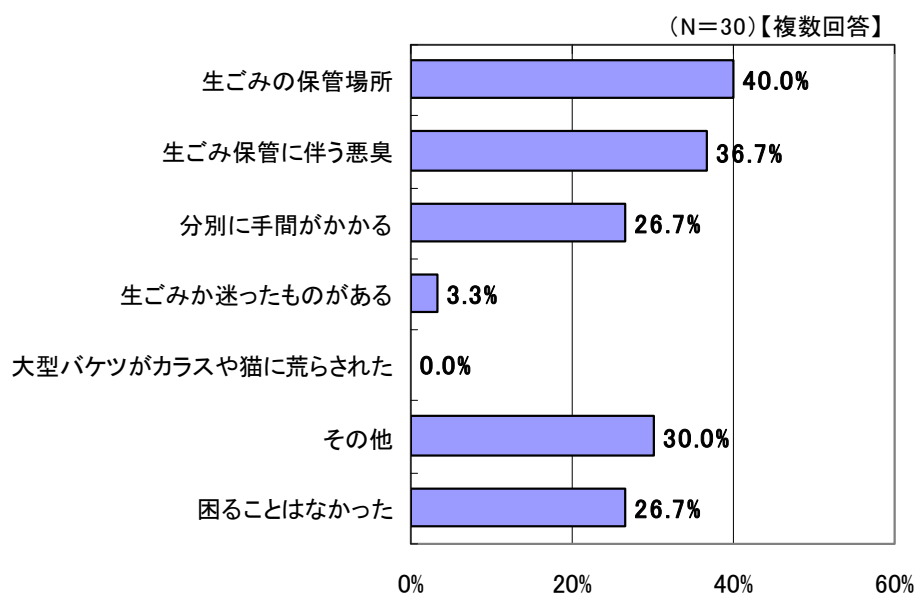


図 分別の際に困ったこと、問題点

そのほかの問題点として以下のものが挙げられた。

【保管場所・悪臭の問題】

- ・悪臭が気にならず、野良猫に荒らされずに保管できる場所が確保できない。
- ・真夏日には、腐敗臭が酷かった

【ごみ集積所の問題】

- ・ごみ集積所に設置されているバケツが高く、生ごみを入れ難い
- ・雨天時に傘をさしたまま、ごみ集積所に設置されているバケツの蓋を開けるのは困難である

【生ごみ分別用バケツの問題】

- ・屋外に保管する際、動物に荒らされないようにするには蓋をロックできる機能が必要であるバケツが小さすぎる。

【収集回数の問題】

- ・生ごみの収集が週2回、生ごみ以外の可燃ごみの収集が週1回となり、収集日がすべて異なるため、ごみ集積所へ行く回数が増え負担になった。

【分別方法の問題】

- ・水きりネットから生ごみだけを取り除くことが面倒だった

なお、「生ごみか迷ったものがある」と回答した方の迷った品目としては、「草花」が挙げられた。

### ⑤ 生ごみ分別への今後の協力意向

今後、今回の実験と同様の方式で生ごみ分別を継続するとした場合の協力意向については、「簡単であり続けられる」が40.0%、「面倒だが続けられる」が23.3%と、協力意向がある人が約6割を占めた。一方、協力意向がない人も23.3%と比較的高く、先に挙げた問題点等を解決しつつ、周知、啓発が必要であると考えられる。

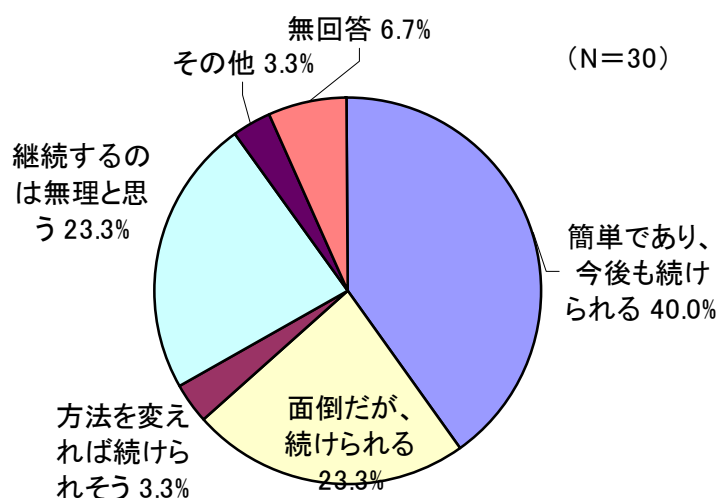


図 生ごみ分別への今後の協力意向

## ⑥可燃ごみの収集回数が減少したことによる問題点・課題

生ごみ以外の可燃ごみの収集が週1回になったことによって困ったこと・問題点については、困ったことや問題点を挙げた人、何も無かった人がそれぞれ半数程度であった。

困ったこと・問題点の中では、「1回当たりの排出量増加で、集積所に運ぶのが大変」や「ごみの保管場所に困った」といった問題を挙げる人が多かった。また、「ごみの保管に伴う悪臭」も16.7%となっていた。

一方、そのほかの問題としては、おむつを使用しているため、収集回数が減少するにおいや保管の面で大変であるとの回答が挙げられており、収集回数を減らす際には何らかの措置を講じる必要があるといえる。

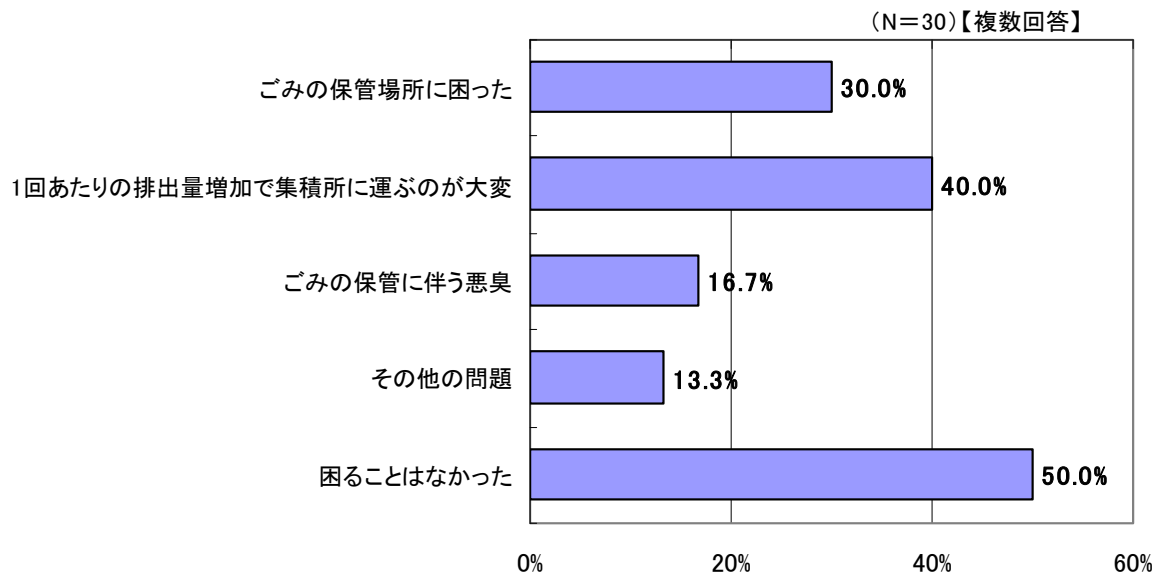


図 生ごみ以外の可燃ごみの収集が週1回になったことによって困ったこと・問題点

## ⑦生ごみの有効利用に関する取組への賛同意向

生ごみを発酵させた際に得られるガスをエネルギー利用することや、たい肥化して農地に還元すること等、生ごみを焼却せず有効利用する取組については、「大いに賛成」が40.0%、「賛成」が43.3%、「条件が満たされるなら賛成」が13.3%と、賛同意向がある人が9割以上を占め、「反対」は皆無であった。

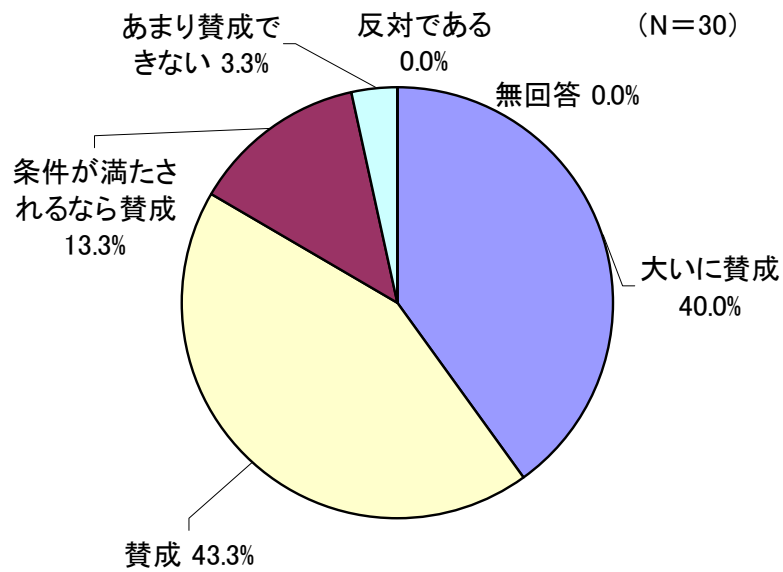


図 生ごみの有効利用に関する取組への賛同意向

なお、「条件が満たされるなら賛成」と回答した人の条件として以下のものが挙げられた。

- ・生ごみも燃えるごみも悪臭対策として2回／週の収集が望ましい
- ・設備投資が必要であるならば投資対効果によりメリットがあるならば実施しても良い
- ・設備の設置場所など新たな問題を解決できるのか心配